



町民文芸

只見短歌会

十月詠草

大塚栄一

指導

病院で会ひたる友がわが顔の瘦せしを言ひてまたも触れたり

古川 英子

ひと時を呼び交すごと嫋は風吹くやうに次々に鳴く

小倉キミ子

講演で越後と会津を語る会聞きたび歴史よみがへり来る

関谷登美子

定まりし昼寝のうちに夕立の降りきて干し置く豆みな濡らす

馬場 八智

今年の文化祭にも晴れたりと今亡き父との峠路思ふ

新国由紀子

過疎の地の文化祭にも黒人の団体見えて握手を交す

渡部ゆき子

工事半ば陰になりつつ児童等の通行するを案じ見送る

目黒 富子

弟の病気の重くなりしより米寿の兄の言葉減りたり

五十嵐夏美

勤め終へ数年たてど今もなほ整理の出来ぬ家の中なり

渡部ヨリ子

老衰の夫の食事を病もつわれより時かけ娘養ふ

新国 洋子

(出詠順)

只見俳句会

十一月例会

目黒十一

指導

代替わりあつきり切らる柿落葉
美人女医白衣の眩し秋麗

リウコ

都

栗の毬足でさばいて頬かむり
ダム湖水左右にゆれて台風去る

一穂

代々の漬物石や冬に入る
林檎来る太陽いっばい詰め込んで

洋子

初雪や今こそ決心すべき事
窯場へと道坂がかかる秋海棠

礼

塀白き庫裏や大根吊るされて
未枯やそこはかとなく風流れ

信

継之助の夢の塩沢一葉落つ
なにもなく起きる幸せそぞろ寒

邦男

実南天日毎輝き晴れつづく
駅伝の走者見え来る薄紅葉

大袈裟に丸太で包む冬囲い
炬燵から雪降る庭木眺め居る

藤彦

又壺歩

菊の花摘む母の背の丸きこと
垣添いに菊の花咲く空家かな

恒夫

小字七戸の三戸は無住冬紅葉
只見線鉄路の錆や谷紅葉

吉見

水輪幾重のどやかに添ふ番鴛鴦
日を受けて目薬紅葉緋と映ゆる

邦夫

薬箱備えて長き冬に入る
持て余す十一月の積もり雪

修一

雪吊の黒松一本すつと立つ
我が家にも干柿下がる新時代